



おかげさまで20周年！

子どもたちとワークショップをする中で感じたことを発信したいと始めたこの連載も、早いもので5年目となります。今シリーズではワークショップの中でよく受ける質問について、僕がどのように考えているかお答えします。

きえるって
むしろいかも!?

ピンチはチャンス

新型コロナウイルスがいまだに猛威を振るっていますが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。こんな大変な状況の中、ジャパンGEMSセンター設立20周年を迎えます。2001年にJEEF内に誕生した小さなセンターですが、多くの方と関わり、支えられながらさまざまなチャレンジをしてきました。

このコロナ禍でも、対面グループワークをベースにしているGEMSは大ピンチに陥る…かと思いきや、身近なものを使って探究をつくるというGEMSの特徴がむしろ強みとなって、新しいワークショップが次々に生まれていきました。

例えば、親子講座では各家庭で教材を準備していただき、同じようなものを持つているようでもみなちよつとずつ違う道具や材料で実験するという「違い」を楽しむワークショップ。実験の目的は同じなのに、使っているものが違うから結果も微妙に違うという設定は、みんなでピッタリ同じ結果が出るよりも、「なんで〜?」と子ども達の知的好奇心を刺激します。「浮く? 沈む?」

というプログラムでは、水を張ったボウルや水槽にいろいろなものを入れて、水に浮くか沈むかを検証するのですが、一人の子がジャガイモを入れて「あつ! しずんだ!」と言ったのを聞いて、他の子が「じゃあサツマイモなら...?」とキッチンにダッシュ。このように「オンラインでもハンズオン(体験型)！」が今のGEMSセンターの合言葉です。

質の高い教育を「みんな」に

オンラインでもう一つチャレンジしているのは、これまで手の届かなかった子ども達にGEMSを届けるということです。地方の子達だけでなく、病院に入院していたり、海外にお住まいでなかなか対面のワークショップに参加できない子ども達ともオンラインであればつながることが出来ます。

特に、コロナの影響で外部と遮断さ

れてしまっている病院内の子ども達は、毎回GEMSの時間をとても楽しんでくれています。病院内に持ち込めるもので実験の続きができるので、あの後こんなことやったよ!とお手紙をくれたりもします。僕は普段あまり意識しなくなってしまうことかもしれないですが、明日も楽しいことが待っているという感覚は、子ども達にとつてとても大切なものです。

SDGsのゴール4で掲げられている「質の高い教育をみんなに」。この「みんな」の枠をどこまで広げられるかが、いまGEMSセンターの目指していることです。コロナ時代になって、これまで僕達が想定していた「みんな」の外側にいる子ども達に気がつきました。そして、きつとまだつながれていない層の子ども達もいるでしょう。GEMSセンターが20年で積み上げてきたものを、これから多くの子ども達に提供していきます。

鴨川 光

(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。ジャパンGEMSセンター主任研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

